

【長唄小曲 松づくし（まつづくし）】

うたい囃せや大黒

一本目には池の松

二本目には庭の松

三本目には下り松

四本目には志賀の松

五本目には五葉の松

六つ昔は高砂の

尾上の松や曾我の松

七本目には姫子松

八本目には浜の松

九つ小松を植並べ

十でとよくの伊勢の松

この松は芙蓉の松にて情有馬の松ケ枝に

くどけばなびく相性の松又何時何時の約束に

日を待つ（松）時待つ（松） 暮を待つ（松）

連理の松に契をこめて 福大黒を見さいな

【長唄 手習子(てならいこ)】

飽かぬ眺めの可愛らし 遅桜 まだ蕾なり花娘 寺子戻りの道草に

てんと見事な色桜 雛草結ぶ島田鬚 はしたないやら恋じややら

肩縫ひ上げのしどけなく 紙擦喰ひ切り縁結び 解けかかりし縺子の帯 振の袂のこぼれ梅

花の笑顔のいとしらし 二つ文字から書初めて 愷気恥し角文字の 直な心の一筋に

お師匠さんの仰しゃったを 真に忘れはせぬけれど

娘々と沢山そうに 言ふておくれな手習ひ覚え 琴や三味線踊りの稽古

言はず語らぬ我が心 乱れし髪 of 乱るるも つれないは唯移り気な どうでも男は悪性者

桜々と謡はれてはれて 言ふて袂の分二つ 勤めさへただうかうかと

どうでも女子は悪性者 東育ちは蓮葉な者ぢやえ

恋のいろはにほの字を書いて それで浮名のちりぬるを わが世誰そつねならむ

心奥山けふこえて 逢ふたゆめみし嬉しさに 飲めども酒に酔ひもせず 京ぞ恋路の清書なり

諸鳥の囀り 梢々の枝に移りて風に翼のひらひらひら 梅と椿の花笠着せて

梅と椿の花笠着せて 眺めつきせぬ春景色

夫のためとて天神様へ願かけて 梅を断ちますめいはく サア 我れ一代

【小唄三題（しきさんばそう）】

《秋の七草（あきのななくさ）》

秋の七草 虫の音に 鳴かぬ虫が 身を焦がす

君を待つ虫 なく音に細る 恋と言う字は大切な

月の夜桜 袖の露 濡れし縁のひとえ帯

つくしの筆に 文書きそむる 恋という字は大切な

《勝名のり（かちなのり）》

勝名のり 後姿もうつとりと 見れば見る程 粋な決め手が 今も目に アままになるなら

横綱はらせ アーまわしの模様は隅田川 百本ぐいに都鳥 向こうの空に富士の山

高く打ち出す回向院 櫓太鼓はてんでんと 音の響きや東雲に ぬしと千鳥がヨオー アー

してみたい ホツと吐息を みとがめられて ほてった顔に アラ 夏の風が吹くえ

《どじよっこ》

裏の小溝にどじよっこがちよろう ちよろうちよろう おかか待つてろよ オットとこらしよ
とっつかまえりヤツー ひっつかまえりヤツー ツツツツツルリン
おやおや誰かにそっくりじゃ ぬらりぬらりとさ とらまえどころが ないじゃないかいな
とっつかまえりヤツー ひっつかまえりヤツー ツツツツツルリン ツルツルツルツル
アツ逃げちゃった

○辰巳の左褌（たつみのひだりづま）

喧嘩は江戸の花笠や 町の揃いの半纏に 幅をきかせた秋祭り もんだ神輿のおさまりも

利かぬ気性の勇み肌 宵宮にかかる永代の 浮名も辰巳深川や 八幡鐘の後朝に

仲町むすぶ富が丘 お神酒が効いた酔いと酔い 競う素足の意地っ張り あっしあ辰巳の左褌
ヤア やんれひけひけ よい声かけて エンヤラサ やつと抱きしめ 床の中から
小よぎふとんを なぐりかけ なんでもこっちを向しゃんせ よいよい よいやな
よいなかどしの こいさかいなら痴話と口舌は なんでもかんでも こんやもせ

東雲の明けの鐘 ごととなるので仲直りすみました よいよいよんやな

【長唄 春調娘七種（はるのしらべ むすめななくさ）】

神と君との道すぐに 神と君との道すぐに 治まる国ぞ久しき

若菜摘むとて袖引連れて 思ふ友どちよい仲よい仲 仲のよいのを脇から見れば

どれが姉やら妹やら よく似たなア よく似た さつてもよく似たしやなしやな行けば

振もよし 今来るよねに見しようずもの 見しようずもの 袖引きひくな若き人

あら大胆な人じやえ

春は梢も一様に 梅が花咲く殿造り 「目指す敵は」 「ムウ」 いや傍に鶯の

「工藤左衛門祐経」「ホ ホ ホウー」 ほう法華経 ほう法華経と囀りても

餌ばみも知らぬ雲けらけら 空うそふいて 「とびかかつて」「ハテ」

気を鎮めて打囃し 初若水の若菜のご祝儀 大和仮名文いつ書き習ひ

誓文一筆参らせ候べく かしと留袖 問ふにや落ちいで語るに落ちる 様は茨か

わしやゆひかねて 抱いていたさよいつとても 誓文一筆参らせ候べく かしと留袖

問ふにや落ちいで語るに落ちる 様は茨かわしやゆひかねて 抱いていたさよいつとても

睦まじと君は知らずや瑞籬の 久しき代々のためしには 引くや 夜の鼓の拍子を揃へて

七種なづな 御形田平子仏の座 菘 清白芹薺 七種揃へて恵方へきつと直って

しつたんしつたん どんがらりどんがらり どんどんがららどんがら

唐土の鳥が 日本の土地へ 渡らぬ先に

怨敵 退散 国土安穩 千秋楽楽 万歳 万歳 今を盛りの心の花も 開くる開くる運は天

天長地久 万里が外かも 打納めたる今日の七種